

報 告

新型コロナウイルス感染症流行下の看護学各論代替実習における 看護学生の学びに関する文献研究

井手 裕子* 坂部 滯* 坂本 未穂* 水原 美地*
橋本 真弥* 石井 奈央* 安藤 愛*

＜要 旨＞

本研究は、新型コロナウイルス感染症流行下における看護各論領域の代替実習で、看護学生がどのような学びを得たのかを探り、今後の実習指導における示唆を得る目的で文献研究を行った。文献は医学中央雑誌 Web 版を用いて「コロナ or COVID-19 and 看護 and 実習」をキーワードに全年検索し、学生の学びが明確に記載された 8 編を対象とし、マトリックス表で整理した。その結果、4 つの実習形態と 7 つの実習方法が抽出された。学生は、看護事例の展開、グループワークやディスカッション、ロールプレイ、講義などを通して、対象に応じた問題点や援助方法、更に多職種の役割や連携の重要性を学んでいた。しかし、実際の対象者との関わりをもつことができない代替実習では、感情の揺らぎを伴う学びは見受けられず、看護者としての援助の人間関係の構築とそれに伴う命の尊さや看護観・人間性を育む経験を積むことには限界がある。今後、臨床現場と連携し、リアリティや感情の揺らぎのある実習方法を検討していく必要がある。

キーワード：新型コロナウイルス感染症流行下、臨地実習、代替実習、看護学生、学び

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い 2020 年 4 月 16 日に日本全国を対象とした緊急事態宣言が発令された。それに伴い多くの看護系大学において、予定していた実習施設での実習受け入れが困難となった。同年 6 月 1 日に、文部科学省高等教育局医学教育課から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設などの対応について」¹⁾の通達があり、臨地実習を学内実習で代替し単位取得が認められることとなった。そこで本学も 2020 年 8 月から各領域で実習目標や実習方法の見直しを行い代替実習を行った。

看護学における臨地実習とは、実際の医療現場で看護実践を通して対象者との援助的人間関係を構築するものである。代替実習には学内実習・学内演習、オンライン（遠隔かつ双方向性）、紙面による課題学習とさまざまな方法があるが、代替実習では、対象者を紙上事例や模擬患者とせざるを得ない。代替

実習において、対象者との援助的人間関係の構築は可能なのだろうか。代替実習を指導する中で本学の実習担当教員から、思考過程に関する内容には一定の教育効果をあげることはできたと感じる一方で、対象者との人間関係の構築や、チーム医療、倫理観や態度面などの教育効果に関して、十分ではないのではないか、という意見が出された。

2021 年 6 月 8 日に出された「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書」²⁾によると、大学の看護師等養成課程の全学年の臨地実習の代替措置（臨地の場以外での教育代替）の実施有無では、289 課程中 40.1%が「すべての科目で実施した」、57.1%が「一部の実習科目で実施した」とあり、多くの看護系大学でも代替実習が行われている。また、代替実習の方法や、それに対しての学生の学びに関する文献も多く見られるようになってきた。そこで今回、文献研究を行うことにより他の看護系大学での取り組みを知り、いまだ感染終息の目途が付かないコロナ禍

*西南女学院大学保健福祉学部看護学科

での実習の在り方を検討するための示唆を得たいと考えた。

II. 目的

新型コロナウイルス感染症流行下における看護各論領域の代替実習で、看護学生がどのような学びを得たのかを探り、今後の実習指導における示唆を得る。

III. 研究方法

1. 文献検索の抽出方法

コロナ禍における看護系大学の学生の学びに焦点を当て文献検索を行なった。文献は、国内の2020年から2022年までの新型コロナウイルス感染症が発生以降に掲載された看護系大学に限った研究論文を対象とした。

検索キーワードには「コロナ and 看護 and 実習」「COVID-19 and 看護 and 実習」を用い、いずれも「会議録を除く」「抄録あり」で検索を行った。検索は2021年7月（検索時、医学中央雑誌 web. ver5；旧バージョン）と2022年4月（検索時、医学中央雑誌 web. 新バージョン）の2回に分けて行った。1回目の検索結果では「コロナ and 看護 and 実習」にて16編、「COVID-19 and 看護 and 実習」にて15編、2回目の検索結果では「コロナ and 看護 and 実習」にて131編、「COVID-19 and 看護 and 実習」にて126編が該当し、重複を除く原著論文は53編であった。1回目の検索時に医中誌 Web の他、メディカルオンラインでも検索を行なったが、対象となる文献が医中誌 Web との重複していたことから、検索エンジンを医中誌 Web のみとした。53編の文献のうち、明確に学生の学びが詳細に記載している文献8編を今回の対象論文とした（表1）。

2. 分析方法

対象とした文献の概要を示すためにマトリックス表を作成した（表2）。マトリックス表には著者、年月日、目的、研究デザイン、結果に加え、本研究で明らかにしたい実習形態・展開方法、代替実習における学生の学び、学生の展望および今後の課題を抽出した。さらに、学生が実習方法別にどのような学びを得られたのかを表に整理した（表3）。

3. 用語の定義

本研究で用いる用語は以下のように定義する。

1) 代替実習

文部科学省の「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書」³⁾の用語説明を参考に、「臨地実習を演習や学内実習などに教育方法を変え教育内容を担保する実習」とする。

2) 学び

日本語で「学び」を表す用語には、修得する学びと習得する学びがある。本研究での「学び」は、「学生が単に覚えるだけの学習ではなく、学び得た知識・技術を身につける学修」とする。

4. 倫理的配慮

分析対象文献を引用した場合は、常に出典（著者）が分かるように明記し、巻末には論文で使用した文献について適切に表記を行った。引用する場合には、本研究の考えと混同し著者の意図から逸脱しないようにした。表を整理する際には、著者が記載している内容や意味に反しないように要約を行った。また、複数の研究者で齟齬がないかを確認した。

IV. 結果

分析対象とした文献の概要を表2、実習方法における学生の学びの詳細を表3に示す。

表1. 医学中央雑誌 Web 版による検索数

検索 word（条件：会議録を除く原著論文）

検索時期	キーワード	該当数	候補数	対象文献数
1回目 2021年7月	コロナ 看護 実習	16編	53編	8編
	COVID-19 看護 実習	15編		
2回目 2022年4月	コロナ 看護 実習	131編		
	COVID-19 看護 実習	126編		

表 2. 対象文献の概要

番号	著者 (発行年)	タイトル	目的	研究 デザイン	実習形態・展開方法	結果	代替実習における 学生の学び	学生の要望および 今後の課題
1	山口ら (2020)	臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告～在宅看護実習での学生アンケートの結果から～	動画を用いた教育方法の効果と課題を学生アンケートの記述から明らかにすること	アンケート調査を用いた量的・質的研究	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> 前半45時間は、学内実習とオンライン実習 後半45時間のうち、臨地実習16時間、学内実習とオンライン実習29時間 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> 教員が作成した資料からの情報収集 使用した動画は、訪問看護2事例 動画場面は術後療養者の退院前カンファレンス、初回訪問看護、終末期にある療養者・家族サービス担当会議、訪問看護 動画視聴により訪問看護に同行したと想定し同行訪問記録の作成 次回訪問時のケア計画の立案 グループワーク、教員の解説によるまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 看護場面をイメージし、家族や環境をふまえた総合的なアセスメントと実際の支援について疑似体験をすることを目的とした訪問看護事例の動画は、9割以上の学生が臨地実習のイメージトレーニングに少しでも役に立ったと答えた 	<p><動画事例活用実習についての学び></p> <ul style="list-style-type: none"> 観察の視点 関わりのポイント 療養者や家族への接し方 療養者や家族の強みを生かした支援 リスクの予防の教育・指導 多職種との連携方法 自宅にあるものを使用した援助方法 限られた時間の中で効率的に行うこと 	<p><事例の情報不足></p> <ul style="list-style-type: none"> 動画事例に不足する情報の提示 <通信の問題> 学生の通信環境に応じた個別対応 Web システム上での質問以外にも電話で質問時間を明示するなど学生がタイムリーに問題解決できるような仕組みが必要 <グループワークの進め方> グループワークの時間が長かった、グループワークの必要がわからなかったという意見から、話しやすい環境への配慮や、教員間の情報共有の強化と学生の意見を引き出すファシリテーション力の向上が課題
2	岡田ら (2021)	対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価—COVID-19感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために—	A大学における対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習内容を検討し、実施し、学生評価を用いて実習後の成果を明らかにすること	学生評価を用いた実施前後の量的・質的研究	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> オンライン実習と学内実習のハイブリッド型 オンライン実習は主に教員や指導者との対話式講義 学内実習はグループでの対話やディスカッション <p><展開方法：オンライン></p> <ul style="list-style-type: none"> 学内対面〇 自己学修による在宅看護事例の理解(全体オリエンテーション〇) 事例に基づく在宅看護の対象理解の共有の深化(1日目〇、2～3日目〇) 課題探求と対象理解のむすび付け(4日目〇、5～6日目〇) 在宅看護計画の作成、在宅看護の知識と個性をふまえた技術の統合(6日目〇、7～8日目〇) 課題探求の統合(9日目〇、10日目〇) 	<ul style="list-style-type: none"> 回収率は実習前62%、実習後39.4% 自己学修時間は実習後が長かった 「親や知人に聞く」「教科書以外の本を読む」「友達と相談」「インターネット」の主体的学修方法を活用していた学生の割合は、実習後で増加した 実習前後で比較すると、実習目標に則した8つの評価項目は、全ての項目において実習後で高くなった 	<p><自己評価></p> <ul style="list-style-type: none"> 「1.生活者としての在宅療養者や家族の理解」は、実習後の点数と点数の伸びが最も低かった 「3.生活と医療の統合した看護」、「4.目標志向型看護実践」、「5.生活と価値観の尊重」の3項目は、実習前後の平均点数の伸びは先の項目の次に低かった 「6.社会資源の在り方」は実習前で最も評価が低かったが、実習後では0.7高くなっていた 「7.あなた自身の思考や価値観への理解」が、実習前後ともに高かった 「8.地域包括ケアシステムにおける多職種連携」は、平均点の前後差で最も点数が伸びていた <p><そのほか></p> <ul style="list-style-type: none"> (教師の)熱意が伝わり在宅看護の魅力を楽しく学ぶことができた 記録作成のためでなく“その人”に向き合うことができた 	<p><オンライン学修による在宅看護イメージ化の限界></p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者や社会資源、多職種連携についてイメージがするのが難しい <オンライン学修による対話促進型相互学修の限界> タイムリーに質問ができなかった 困ったときに友達と話し合うことができなかった 他の学生の意見と異なると不安になった グループメンバーの進捗状況が分かりにくかった <臨地実習への希求> 実際の対象者と関わっていないため、自分の看護技術に自信が持てず、臨地へ行き実習したい思いを高めた <p><オンライン学修実施の改善点></p> <ul style="list-style-type: none"> オンライン環境の改善 気軽に常時の助言が得られる体制 事前の授業資料配布の課題 配信映像録画の視聴 グループの時間配置の公平性
3	和田ら (2021)	新型コロナウイルス感染拡大下の在宅支援論実習～遠隔実習の試み～	リモート実習の内容を可視化し、学生への学習効果を検討し、次年度の実習につなげること	アンケート調査を用いた量的・質的研究	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> Cisco Webex Meetingsを活用したリモート実習 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ペーパーバイシエントの患者1名の看護過程の展開の実践 DVDの視聴(訪問看護師のDVDと通所施設の撮影動画) Web 講義(在宅医師・歯科医師：初回場面を録画し、以降録画講義) 実習指導者(通所サービス、居宅ケアマネジャー、訪問看護師)や薬剤師とのWeb カンファレンス 実習施設メンバー(2～4名)によるグループワーク 実習施設メンバーの合流(6～8名)カンファレンス 個人ワーク 	<ul style="list-style-type: none"> 回答者は、60名中42名 Web カンファレンスやWeb 講義の学習効果は高かった 学生の在宅実習への興味・関心が実習前にはばらつきがあったが、実習後には高値へと変化していた 	<ul style="list-style-type: none"> 実際の療養者との関わり方や具体的な看護師としての役割 サービスを利用する状況やタイミング 多職種連携の大切さ 多職種と共有する情報やそれに伴う観察の視点 各職種の役割や課題、地域における活動 看護師とは違う視点や看護師に対する多職種の印象 在宅看護の楽しさ 学生間や多職種間での意見交換による視野の広がり 助言による思考の深まり 	記載なし

コロナ禍の看護代替実習における学生の学び

4	壬生ら (2021)	COVID-19の影響を受け実施した在宅看護学実習の評価と今後の課題	学内実習の実践内容を報告するとともに、実践から見えた学生の学びと実習内容の課題を明らかにし、今後の在宅看護教育における、実習のあり方を検討する資料とすること	学生レポートの内容分析による質的研究	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内実習 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ・提示された10事例の中から興味のある5事例を選択(1事例受け持ち対象者、その他4事例は記録上での実施) ・訪問回数は合計7回 ・管理者の講義や地域包括ケアシステム、多職種連携、継続看護の理解のためDVD視聴 ・看護技術確認テスト ・受け持ち事例の看護過程プレゼンテーション ・カンファレンス ・国家試験問題100問 	<ul style="list-style-type: none"> ・分析の結果、327の「学び」と129の「意見」の合計456コードが抽出され、67サブカテゴリ、10カテゴリ、5コアカテゴリが導きだされた ・学生は学内実習体験を通して、自己の課題・目標について考えを深めていた 	<p><教員実習評価(4段階評価)></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「療養者・家族の理解」が3.21 ・「在宅看護の理論と実践の統合」が3.15 ・「訪問看護過程の展開(受持事例)」が3.13 ・「訪問看護ステーションの役割機能」が3.24 ・「多職種との連携の理解」が2.99であり、一番低い ・「実習態度」3.77が一番高い <p><学内実習における学び></p> <ul style="list-style-type: none"> ・在宅看護の特徴と看護の実際(価値観を尊重した療養者・家族の理解、在宅における看護技術の方法・工夫、訪問看護過程の展開) ・地域連携・地域包括ケアシステムの理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・臨地実習が制限された場合でも柔軟に対応できる実習要綱の作成 ・学内実習は学生がじっくり事例に向き合うことができることから、実習期間内に組み入れることは効果的 ・看護技術を安全・安心・安楽に提供できるよう演習の機会を増やし、教材の充実を図る ・経済的側面や社会保障制度、診療報酬、訪問看護報酬などの学習内容を強化する ・訪問看護ステーションと連携を密にし、人材を常に確保できる体制整備
5	早瀬ら (2021)	オンラインでの母性看護学実習における学習効果	母性看護学実習におけるオンラインでの学習内容として対象理解や看護ケアに繋がり、学生の実習目標を達成できるものか考察すること	アンケート調査を用いた量的・質的研究	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・Google Meetを活用した10日間オンライン同時双方向型実習 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ・1日目は学生自身やパートナーのバースプランや出産場所についてのディベート ・2-3日目は産褥1-2日目の褥婦の看護過程の展開 ・4-5日目は産褥1日目の看護・生後1日目の新生児のケア(看護技術チェック) ・6-7日目は産褥3-4日目のアセスメント・看護計画の立案 ・8日目は産褥1~4日目の授乳介助(看護技術チェック) ・9日目は退院に向けての社会資源の学習、退院後の生活の育児支援についてのディスカッション 	<ul style="list-style-type: none"> ・回収率は60.7% ・ハード面やコミュニケーションの問題はあったが、学生は様々な困難を感じつつも臨地実習と同様の学びも得られており、オンラインでの実習代替案による学習内容の効果が認められた ・看護過程の展開は、学生8割以上が経時的に対象を捉えることができおり、9割以上が対象を理解した上で個別性を考えて看護計画を立案できたと感じていた 	<p><Google Meetを使用した看護技術において「対象者との共感的な関わりの上での信頼関係を築く方法が理解できた」では、他の項目に比べてネガティブな回答が多かった</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生自身が調べ発表しグループメンバーと意見交換した学習内容に学びがあったと回答した割合は他の質問項目よりも多かった ・グループでの学びについては効果的と回答した割合が多かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン実習は、実習記録のやり取りが容易にできたが、実習の時間配分について適切でなかったと考える学生や、対象者と信頼関係を築く方法について理解できなかった学生が多かった ・Google Meetでの看護技術チェックについてはPC・カメラ・電波状況の不具合や技術チェック方法の改善が課題 ・Google Meetでの発表・カンファレンスについては人数がカンファレンスに影響することや話すタイミングの難しさ、電波の問題が課題
6	田中ら (2021)	学内実習プログラムで実施した小児看護学実習における学生の学び	学内実習プログラムで実施した小児看護学実習での学生の学びと課題を明らかにし、今後の実習のあり方や実習におけるよりよい教育方法について検討する	自記式質問紙調査学生のレポートを用いた質的研究	<p><実習の形態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・Zoomを活用したオンライン実習 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ・7.5日間の実習のうち前半は、学生が教員からの個別指導を受けながら個人学習で紙面事例を用いた看護過程の展開と看護技術の課題に取り組む期間 ・実習後半に、各自の学習成果を持ち寄り、情報共有や意見交換ができるようにカンファレンスを設定した 	<ul style="list-style-type: none"> ・自記式質問紙調査は、回収率43.8% ・学生の実習レポートは、回収率68.5% ・学生は学内実習においても子どもの特徴や子どもの独自のケアの方法といった小児看護学実習で学修すべき要素は学んでいた ・対象者の反応といった臨地で体験を通しての学びや倫理的な態度について学ぶことには課題がある 	<p><質問紙調査：特に学べた項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供のへのケアでは子どもならではの工夫がある ・子どものケアには健康的な発達を理解が重要 ・同じケアでも人が変わる ・子どもの反応は変わる ・家族の誰かが入院した場合、家族は影響を受けるが、子どもならなおさら影響を受ける ・子どもが望んでいることやどうしたいか、想像力を働かせて考えることが必要 <p><実習レポート：学び></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達段階に合わせた看護の必要性 ・家族に対する援助の必要性 ・入院中の子どもの発達を促す重要性 ・病期や今後を見据えた援助の重要性 ・子どもの看護を担う自覚 ・子どもの苦痛を緩和するための工夫 ・子どもの側に立った看護実践の重要性 ・子どもの身体的特徴を理解する必要性 ・子どもの頑張りを意味づける重要性 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習目的に合致した教材の提示や学生の学びを広げるための指導上の工夫、カンファレンスの企画・運営が重要 ・学内実習を行う際には、病院実習で学べるようなリアルさを学生が体験できるよう演習を組み入れる等の工夫が必要 ・臨地と学内をつなぐハイブリッド型実習の検討

コロナ禍の看護代替実習における学生の学び

7	土岐ら (2021)	自由に行動できない体験から創出した精神科看護支援コロナ禍における精神看護学内実習の一演習から	コロナ禍にある学生が自由に行動できない体験をどのよう捉え、その捉えから創造した看護支援や精神看護学内実習の一演習から学修した内容を明らかにすること	学生の演習記録用紙からの質的記述的研究方法	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン実習は3日間、学内実習は7日間 ・研究対象演習日は事前学習と1日に対面学習 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習は、コロナ禍で自由に行動できない体験をどのように感じているか1週間記録A41枚に記載 ・学内学習は、6名60～90分のグループディスカッションし精神科に入院する応じ者の自由に行動できない体験を想像し、具体的なケアを言語化できるよう促した ・演習後、自由に行動できない体験から創造して精神科看護支援、演習から学んだことをA41枚に記載 	<p>・対象は、学生71名の演習記録</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5つのコロナ禍で自由に行動できない体験、8つの創造した精神科看護支援、5つの演習からの学びが明らかとなった ・ストレスマネジメント力の強化、知識と現象を結びつける力の育成、グループの治療的効果を活用する視点、創造力を発揮した看護支援の創出が演習成果として示された 	<p><実習の演習からの学び></p> <ul style="list-style-type: none"> ・想定していない閉鎖的な環境における不安感の増強 ・置かれた状況やあらわれている反応が同じであっても影響する要因や価値観、認知の多様さ ・想像もしなかった他者の嗜好や価値観、認知への気づき ・グループにおける相互作用による自己を客観的に捉え、自分の力の拡大や心理的サポートが得られることへの実感 ・不安がメンタルに影響を及ぼす実感や自分のレジリエンスの気づき ・理論を用いた自己理解によるストレスの軽減や自己効力感や肯定感が高まる体験 ・困難な状況下においてもリフレーミングを取り入れることで前向きになれる体験 ・支援方法によって行動変容につながることや新たに創造することへの気づき 	記載なし
8	木下ら (2022)	新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の代替学内実習での学生の学び	新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の代替学内実習におけるA大学の学生の学びの内容を明らかにすること	学生の総括記録を用いたテキストマイニング法による質的研究	<p><実習形態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内実習 <p><展開方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生のレジネスの確認 ・国家試験問題のテスト実施 ・ユマニチュード学習 ・認知高齢者と家族の理解(ドキュメンタリー映像の鑑賞) ・紙おむつ体験(内容をKJ法でまとめ、成果発表) ・印象に残った学びの語り合い(ナラティブミーティング) ・紙上事例による看護過程学習(個人学習、グループ学習、ロールプレイ) ・ドキュメンタリー番組鑑賞およびディスカッション ・課題テスト ・文献抄読 ・ルーブリックミーティング 	<p>・総抽出語数は54581語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・階層的クラスター分析では、8つのクラスターが抽出された ・「老年看護の対象理解を中心とした学び」「高齢者支援の方法や場に関する学び」「幅広い視点からとらえる老年看護の学び」の3つの視点で学生の学びを確認することができた 	<p><老年看護の対象理解を中心とした学び></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者、特に認知症高齢者の理解 ・老年看護の理念につながる学び ・高齢者の機能低下を理解 ・人生の先輩として尊重される存在であるという対象理解 ・高齢者支援の方法や場に関する学び ・ユマニチュードを学習し、臨地実習での看護に活かしたいと課題に考えている学生の姿勢 ・高齢者が持ち続けている力の存在を認め、援助に活かすことの重要性 ・生活の場としてのグループホームに関係する学び 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者と直接的なかわりを持つことができないため、学生の思考過程を促進するには、教員の意図的、教育的なかわりが重要 ・実習施設との協力・連携により学習環境の整備を行うことが重要

表 3. 実習方法における学生の学びの詳細

実習方法	文献番号	実習方法の詳細	学生の学び
看護事例の展開	1	動画での2事例展開 事例①人工股関節置換術後療養者 事例②終末期にある肺癌療養者・ 家族のサービス担当者会議および 訪問看護	<ul style="list-style-type: none"> 在宅での生活がどのように行われているか、看護師はどのようなところに 着目して関わっているのか学べた 療養者や家族への接し方、利用者の強みを活かしセルフケアを支援する ことについて学べた 療養者や家族の強みをどのように看護に生かすのか、課題が見つかった場合、 多職種がどのように連携してその療養者の自宅にある物を使って援助を行う方法 について学ぶことができた 在宅看護ならではの視点やアセスメントをあらかじめ知ることができた
	4	5事例の中から、受け持ち事例とし て1事例を選定し、情報をもと に訪問看護過程展開のプレゼン テーション	<ul style="list-style-type: none"> 基本情報シートから情報収集をする中で、どの部分がICFの各項目の情報 となるのか、不足する情報は何かを抽出し、補足していくための情報収集に 時間を充てることができた
	6	学童前前期 男児 ネフローゼ症候群の看護事例	<ul style="list-style-type: none"> 再発を視野に入れ、子どもに病気の説明をすることが重要である 病期（急性期・慢性期・寛解期）を理解することが適切な看護の提供に つながるといった病気の特徴や今後の経過を見据えた援助の重要性について 学んだ
	6	幼児期後期 女児 口蓋扁桃摘出術後	<ul style="list-style-type: none"> 肺が未熟や舌が大きいといった子どもの身体的な特徴から術後合併症の リスクを考えることが必要といった、手術を受ける子どもの看護では 身体的な特徴を理解する必要があることを学んでいた
グループワーク	1	自宅等での動画の視聴と、作成し た記録用紙を学内実習に持参して グループワーク及び教員による解説	<ul style="list-style-type: none"> グループワークで自分にはなかった視点を共有することができた 様々な考えを共有し、新たなアセスメントや看護問題について考えることが できて良かった
	3	実習施設メンバー(2~4名)による グループワーク	<ul style="list-style-type: none"> 互いに意見を伝え、発言を補いあい、話し合いの場で共有できた 自分の意見との違いから大事どころが明確になった
グループ ディスカッション	8	「ユマニチュード入門」の個人学 習とDVD鑑賞後のディスカッショ ン	<ul style="list-style-type: none"> ユマニチュードから、目的を明確にし、患者さんに適したレベルで看護を 行うことで、その人にとってプラスのケアとなることを学んだ
	7	コロナ中で自由に行動できない自 らの体験をどのようにとらえている か「気分・考え・身体反応・行 動」に焦点をあてた事前課題に基 づいたグループディスカッション	<ul style="list-style-type: none"> 想定していない閉鎖的な環境は不安感を増強させる 置かれた状況や現れている反応が同じであっても影響する要因や価値観、 認知は多様である グループにおける他者との相互作用は、自己を客観的にとらえることができ、 自らの力を拡大することができる グループにおける他者との相互作用の中で心理的サポートを得られる 無意識に活用していた防衛機制がストレスや不安を軽減している ストレス理論に基づき自分をアセスメントすることでストレスが軽減される 困難な状況下においてもリフレーミングを取り入れることで前向きになる ことができる ストレングスモデルを活用し自分を理解することで自己効力感や肯定感が 高まる 支援のあり方によって行動変容を起こすことができる
カンファレンス	3	実習指導者（通所サービス、居宅 ケアマネジャー、訪問看護師）と の Web カンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> 実際に療養者などどのような関わりをされているのか、看護師としての役割を 具体的に学ぶことができた 自分たちの経験を踏まえた具体的な関わり方の提案をしてくださり、どうい うときにサービスを利用すべきなのかを理解することができた
	6	カンファレンステーマ 『7歳のマー君が小学1年生らしい 生活を送るために必要な看護と は』	<ul style="list-style-type: none"> 学校に通えない分、病院でも生活を整えることが必要という学びが見られた 入院中であっても同世代の子どもと関わる機会や学習の機会の確保が重要 といった入院中の子どもの発達を促す重要性について学んでいた
	6	カンファレンステーマ 『吸引時の抑制をどう考えるか』 カンファレンステーマ 『みらいちゃんの苦痛を緩和する ための看護とは』	<ul style="list-style-type: none"> 安全のための処置時の抑制は必要だが苦痛を最小限にする工夫が必要と いった子どもの苦痛を緩和するために工夫する必要性について学んでいた 子どもが手術を頑張った経験として意味づけられるように関わるのが重要 シールやスタンプを活用し、頑張りを可視化することが子どもの意欲向上 につながるという、子供の頑張りを意味づける重要性について学んでいた
看護技術の実践	5	グループメンバーの看護技術を観 察する	<ul style="list-style-type: none"> 自分が考えられなかった根拠や留意点について理解できた 画面上でも実践することで頭の整理ができ、課題が明確になった 限られた情報から読み取る能力が必要であることもわかった 母親の身体や表情だけでなく、全体を観察しなければならないことに気づいた 不足していたアセスメントや技術、知識、安全安楽のための配慮を知ること につながり良かった 会話形式だったため母親へのケアがイメージしやすかった 先生のリアルな演技から臨床を想像することができた 褥瘡はこういう疑問があるのかと理解できた 口頭で伝えるためにはしっかり自分で理解しておく必要があった
ロールプレイ	6	Zoomによる母子への問診のロール プレイ	<ul style="list-style-type: none"> Zoomでの母子への問診の演習で、自分が想定していたよりも（家族が） 不安げな様子だったことを学んだ
	6	Zoomを介して学生が看護師役、 教員が母親役となり、子どもに吸 入と吸引を実施するロールプレイ	<ul style="list-style-type: none"> 家族全体に対して支援が必要 医療費の助言といった具体的な支援が必要であることを学んだ 母親に処置の目的や方法、効果を説明することが母親の安心につながることを 学んだ 事例の子どもの母親が妊婦であったことから、母親の身体的・心理的な負担を 軽減する必要性についての学びが多かった 子どもの不安軽減のためにも母親の看護が必要といった、家族への支援が子ども の支援につながることを学んでいた
講義	2	教員又は指導者との対話式講義	<ul style="list-style-type: none"> 現場での実際のケア、イレギュラーの対応など、丁寧に教えてくれた 症状と本人の様子をイメージし、理解しやすかった
	2	チャット機能による対話促進型相 互学習	<ul style="list-style-type: none"> 受け身な授業になると思っていたが、参加型でかつ要点をまとめた短時間の 授業だったので、頭に内容が入ってきやすかった
	3	多職種のWeb講義	<ul style="list-style-type: none"> 普段の講義ではあまり知らなかった、多職種の役割について知ることができ、 地域でどのように活動しているのかわかった 多職種連携の大切さや、各職種の役割や課題を明確化することができた
	4	訪問看護ステーション所長による 講義・指導	<ul style="list-style-type: none"> 看取りでの意思決定支援・プロセス・エンゼルケアの大切さを学んだ 訪問看護ステーションのイメージができ、臨床と在宅の相違の理解できた 療養者、家族を予防から看取りまで丸ごと見る大切さを知ることができた

1. 研究デザインについて

研究デザインは、質的研究 4 編、量的・質的研究 4 編であった。

質的研究では、学生記録の内容分析やテキストマイニング法を用いて学生の学びと実習内容の課題を明らかにし、今後の実習のあり方やよりよい教育方法を検討していた。

量的・質的研究では、アンケート調査や学生評価を用いて実習内容の可視化や学習効果の検討、今後の課題を明らかにしていた。

2. 実習形態と展開方法における結果について

実習形態は、オンライン実習が 3 編、学内実習が 2 編、オンライン実習と学内実習のハイブリッド型が 2 編、オンライン実習・学内実習・臨地実習を組み合わせた実習が 1 編であった。実習形態別に展開方法における結果について述べていく。

1) オンライン実習^{6) 8) 9)}

オンライン実習におけるツールは、Cisco Webex Meetings や Google Meet、Zoom が使用されていた。

オンライン実習では、看護過程の展開、多職種との Web 講義、実習指導者との Web カンファレンス、DVD 視聴、看護技術チェック、退院後の生活についてのディスカッション等が行われていた。オンライン実習の効果について早瀬⁸⁾は、看護過程の展開で学生の 8 割以上が経時的に対象を捉えることができ、9 割以上が対象を理解した上で個別性を考えて看護計画を立案できていたと述べている。また、グループでの学びについては効果的と回答した割合が多かった^{6) 8)}。しかし、対象者の反応といった臨地での体験を通しての学びや倫理的な態度について学ぶことには課題がみられていた⁹⁾。

2) 学内実習^{7) 11)}

学内実習では、学生のレディネスの確認、講義や DVD 視聴、カンファレンス、ユマニチュード学習（認知機能が低下した高齢者や認知症の方に対するケア技法）、看護過程学習（個人学習、グループ学習、ロールプレイ）、ドキュメンタリー番組鑑賞およびディスカッション、文献抄読、ルーブリックミーティング等が行われていた。学生は、対象者理解を深め、役割や生きがい、家族、環境、地域等といった社会的側面に関係するものまで多岐に渡っており、そのような幅広い視点から看護を捉えることの重要性を学び、学内実習の経験を通して自己の課題や目標について考えを深めることができていた^{7) 11)}。

3) オンライン実習と学内実習のハイブリッド型⁵⁾

オンライン実習と学内実習のハイブリッド型では、オンライン実習は主に教員や指導者との対話式講義が行われ、学内実習はグループでの対話やディスカッションが行われていた⁵⁾。学生の自己評価は、実習前後で比較すると、実習目標に即した評価項目においてすべて実習後高くなっていた。また、臨地実習が行えずハイブリッド型という制限がある中で、対話型オンライン学修を活用し、指導者や教員が学生にリアリティーさを伝えるために、現場での実際のケア、イレギュラーな対応などを丁寧に指導することによって「教師の熱意が伝わり在宅看護の魅力を楽しく学ぶことができた」、「記録作成のためでなく“その人”に向き合うことができた」といった教員の熱意が学生の学習意欲に繋がり、患者と真摯に向き合い看護を展開する姿勢が育まれていた⁵⁾。

4) オンライン実習・学内実習・臨地実習を組み合わせた実習⁴⁾

オンライン実習・学内実習・臨地実習を組み合わせた実習では、教員が作成した資料からの情報収集、2 事例の動画視聴により訪問看護に同行したと想定し同行訪問記録の作成、ケア計画の立案、グループワーク、教員の解説によるまとめが行われていた。実習のスケジュールは、前半 45 時間が学内実習とオンライン実習であり、後半 45 時間のうち臨地実習が 16 時間、学内実習とオンライン実習が 29 時間であった。山口⁴⁾は、学生が看護場面をイメージし、家族や環境をふまえた総合的なアセスメントと実際の支援について疑似体験することを目的として、臨地での体験に近い事例動画の視聴を行っていた。その動画が臨地実習のイメージトレーニングに少しでも役に立ったと回答した学生は 9 割を超えていた。

3. 実習方法と学生の学び

実習方法において学生の学びが明らかになっているものをまとめ表に示し、7 つの実習方法が挙げられた。実習方法は、看護事例の展開、グループワーク、グループディスカッション、カンファレンス、看護技術の実践、ロールプレイ、講義である。実習方法における学生の学びの詳細は表 3 に示す。

1) 看護事例の展開

看護事例の展開を行うことによって、学生は、観察の視点や病気の特徴、発達段階、今後の経過を見据えた援助方法、リスクの予防・指導等、患者の置かれている状況を把握して、患者に合わせた看護

を考えることができていた。また、紙面上での事例だけでなく動画を活用することで、学生は事例についてイメージしやすくなり、患者の生活がどのように行なわれているのか、看護師はどのようなところに着目して関わっているのかを学ぶことができていた^{4) 9)}。

2) グループワーク

学生はグループワークを通して、患者の問題点やリスクを共有し、自分に不足していた視点に気づくことができていた^{4) 6)}。

3) グループディスカッション

学生は、ユマニチュードに関する個人学習とDVD鑑賞後のディスカッションを通して、目的を明確にし、患者に適したレベルで看護を行うことによって、その人にとってプラスのケアとなることを学んでいた¹¹⁾。また、土岐¹⁰⁾は、学生がコロナ禍で自由に行動できなかった自らの体験をどのようにとらえているのかグループディスカッションを行っていた。学生は想定していない閉鎖的な環境が不安感を増強させることを感じ、自己を客観的に捉えることの必要性や他者との相互作用の中で心理的サポートを得られるといった学びを得ることができていた。

4) カンファレンス

学生は、実習指導者とのWebカンファレンスを通して、実際の療養者との関わり方や具体的な看護師としての役割、サービスを利用する状況やタイミングについて学ぶことができていた。また、テーマに沿ってカンファレンスを行うことで、学生は事例患者に対する看護について理解を深めることができていた^{6) 9)}。

5) 看護技術の実践

学生は、グループメンバーの看護技術を観察することで、自分が考えられなかった根拠や留意点に関する理解ができ、不足していたアセスメントや技術、知識、安全安楽のための配慮について学ぶことができていた。また、患者役をした教員のリアルな演技力と会話形式によって、学生は臨床を想像することができていた⁸⁾。

6) ロールプレイ

田中⁹⁾は、Zoomを介して学生が看護師役、教員が母親役となり子どもに看護技術を実施していた。ロールプレイを通して学生は、「家族全体の支援が必要であること」、「子どもの不安軽減のためにも母親の看護が必要であること」、「家族への支援が

子どもの支援につながる」といった学びがみられていた。

7) 講義

教員や実習指導者、または訪問看護師や薬剤師等の多職種が実習の中で講義を行っていた。学生は、講義を通して、現場での実際のケアやイレギュラーな対応について学ぶことができていた。また、多職種が講義を行うことで、普段の講義ではあまり知らなかった多職種の役割について知ることができ、学生は多職種連携の大切さについて学んでいた⁶⁾。

4. 学生の要望および今後の課題

学生は、コロナ禍におけるオンライン実習や学内実習を行う中で、「オンライン実習によってタイムリーに質問ができなかった」、「困ったときに友達と話し合うことができなかった」、「グループメンバーの進捗状況が分かりにくかった」等、困った際の対処やグループメンバーとの連携に不安ややりにくさを感じていた⁵⁾。山口⁴⁾は、Webシステム上での質問以外にも電話で質問時間を明示するなど学生がタイムリーに問題解決できるような仕組みや学生の通信環境に応じた個別対応の必要性を述べている。また、多くの教員が臨地実習と同様の学びを得られるように様々な工夫を凝らして実習を展開していたが、岡田⁵⁾は、対象者や社会資源・多職種連携についてイメージするのが難しいといったオンライン学修によるイメージ化の限界を指摘していた。代替実習を行なった学生は、実際の対象者と関わっていないため、自分の看護技術に自信が持てず、病院へ行き実習したいという思いが高まっている⁵⁾。今後の課題として木下¹¹⁾は、感染状況と実習施設の状況をふまえ、実習施設との協力・連携により学習環境の整備を行うことの重要性を述べていた。

V. 考察

新型コロナウイルス感染症流行下における看護各論領域の代替実習で、学生がどのような学びを得たのかを探り、今後の実習指導における示唆を得る目的で文献研究を行った。

その結果、4つの実習形態と7つの実習方法における学びの詳細が得られた。この結果を踏まえ以下の2つの視点から考察を述べる。

1. 代替実習の実習方法による学生の学び

そもそも本来の臨地実習にはどのような特質があり、その教育方法はどのように考えられているのだろうか。

コロナ禍以前からも臨地実習に関する課題は山積していた。文部科学省の令和元年（2019年）12月20日に公表された「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告」¹²⁾では、学生が担当する患者選定の難しさ、学生が体験できる看護ケアの少なさや内容の制限、臨地実習での経験を活かせる効果的な学修の連動の困難さ等が挙げられている。その課題に対する基本的な考え方として、令和2年（2020年）3月30日に公表された同検討会の第二次報告で策定されたのが「看護学実習ガイドライン」³⁾である。それによると、看護学実習とは「専門科目としての看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を修得する授業」であり、目指すべきは「多様な人を対象として援助することを通して、学生が対象者との関係形成を中核とし、多職種連携において必要とされる連携・協働能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けること」としている。

またこの第二次報告では、臨地実習の具体的な指導方法について「看護過程に基づくケアの実践」「安全なケア環境の整備」「チームの一員としてのケア参画」の3つの項目を挙げている。この指導方法は、換言すれば修得すべき望ましい内容ともいえる。代替実習でこの項目がどの程度達成できたのかを考えてみる。

1). 代替実習で達成できたと考えられる実習内容

「看護過程に基づくケアの実践」では、看護過程の一連のプロセスを学び、立案した計画を実習指導者の支援のもとに対象者に実施したり、学生は実施したケアについて指導者に適正に報告・連絡・相談し支援を受けることが挙げられている。今回の文献研究での看護事例の展開では、領域ならではの視点やアセスメントの理解、病気の特徴や今後の経過を見据えた援助の重要性、不足する情報の抽出や収集に時間を充てることが出来たことが挙げられた。いわゆる看護過程の展開としては、対象者の問題点の抽出や援助方法（看護計画）の立案の段階まではほぼ学べていた。

「チームの一員としてのケア参画」では、学生は

実習グループとしてのチーム、看護職としてのチーム、多職種によるチームの一員としてケアに参画することを通して学びを深化・発展できるように支援することが挙げられている。今回の対象文献では、実習指導者とのWebカンファレンスや多職種からのWeb講義などを通して、看護師や多職種の役割、またそれらの連携や協同といった視点を学べているといえる。各論実習において、学生が多職種の中の看護職の位置づけについて目を向けられるようになるのは実習の後半であることが多い。実習の前半ではまずはその領域の対象となる人々の特性や特徴的な看護について学び、やがて看護職以外の多職種との連携や協同、チーム医療という視点へ学びを進めていく。教員はその学びが進んでいく過程で多職種への指導の依頼調整を図っていくことになるが、実際の臨地実習では学生も看護実践に時間を要し、多忙な多職種との関りに時間をとり話をするという事がなかなかできない場面もある。しかし、代替実習となり、多職種との関りの時間を教員の方から意図的に計画したことにより、このような機会を得ることができたのではないかと考える。このように、学生の学びのプロセスに応じて学習内容が設定できることは、代替実習のメリットといえる。

2). 代替実習では修得が困難であった内容

先述したように、「看護過程に基づくケアの実践」において、対象者の問題点の抽出や援助方法（看護計画）の立案の段階まではほぼ学べていたが、援助の実践（計画の実施）の段階になると、実際の対象者は存在せず、PC画面を通して、人形や対象者に扮した教員に実施するロールプレイとなる。対象者への関りのイメージ作りや必要なケアについての学びは深めることはできたとしても、実際の関りが持てない状況下では、学生はケアの実践に自信が持てなかったといえる。

また本来の臨地実習においては、実践した看護を指導者に報告・連絡・相談できる能力を養っていくが、代替実習ではそのような場面を設定するとなるとやはり教員が指導者に扮することになる。著者らの大学においても、成人看護学領域の学内実習で教員が対象者と指導者の2つの役割を担った場合、学生の意見としては、「先生は評価者であり、患者役や看護師役を担うと、学生としては混乱する」という意見が聞かれた。従ってこれらの能力の育成には、実際の臨地の指導者の協力が必要であると考えられる。

また「安全なケア環境の整備」では、学生が臨地

でインシデント、アクシデントに遭遇した場合の対応と、それらの原因と再発防止策を考えることで学生に学修の機会となるよう支援することが挙げられている。今回の対象文献では、インシデント、アクシデントに関する学生の学びの記載はみられなかった。実際の現場で起こりうる医療事故を忠実に再現するという事は難しいが、各領域で想定される医療事故についての文献やDVD 視聴など利用し、学びを促すことも必要であろうと考える。

3). オンラインを用いる場合の指導上の留意点

学生は、オンライン実習を行なう中で、「タイムリーに質問ができなかった」、「困ったときに友達と話し合うことができなかった」、「グループメンバーの進捗状況が分かりにくかった」等、困った際の対処やグループメンバーとの連携に不安ややりにくさを感じていた。オンライン実習では学生と対面で接していないため、タイムリーな指導が出来ない場合もある。タイムリーに指導が出来なかった場合は、オンライン上で困りごとを入力するシートを配信しておきそれを後で回収して対応する必要があると考える。また、内容によっては、個々の学生とオンラインで画面をオンにした状態で指導をする、電話で指導をするなどの工夫も必要である。

またグループメンバーの進捗状況がわからないといった問題に対しては、オンライン上でのカンファレンスなどを設定し、学生間での話し合いをさせて相互に把握するなどして、グループで協力し合うことで問題解決をしていく姿勢を学ぶことも大切であると考える。

2. 代替実習における学生の感情の揺らぎ

今回の文献研究において、学生は、代替実習であっても実習形態や方法の工夫によって知識・技術的な部分の学びはある程度の深まりをみせ、看護過程の展開では対象に応じた問題点や援助方法などを学び、更に多職種の役割や連携の重要性なども学べていることがわかった。しかし、対象者との関係性を形成する過程での感情面の揺らぎ（例えば身体的苦痛に耐えかねて声を上げる対象者の姿などをみて焦燥感にかられるなど）に関する記載が見受けられなかった。

本来の臨地実習では、学生は対象者との関りをはじめ、臨床指導者や医療スタッフとの関り、また、医療スタッフと対象者との関りを目の当たりにすることで看護専門職者としての学びを深めていく。と

ころが、臨地以外の代替実習では学生は実際の対象者と関りを持つことはできず、また医療スタッフと対象者との関りを目の当たりにする機会がないために、感情の揺れが少なく、対象者やその家族との信頼関係、ひいては看護専門職者としての援助的人間関係を構築することを体感できていないと思われる。

安酸¹⁴⁾は臨地実習での学生の成長する姿を「学内で学んだ知識や技術が患者へのケアにつながり、たとえ未熟であったとしても看護ができた実感できる体験は極めて強烈な動機づけにつながる。患者のリアルな反応は学生の予想を良くも悪くも裏切ることがあり、それが学生の感情や思考を大きく揺さぶる」と述べている。臨地実習での醍醐味は、対象者と直接関わることにより看護職としての人間関係の形成能力を高めていくことにある。そして学内で学んだ専門的な知識や技術を統合させ実践する能力を養うことによって、看護が専門職であることの認識をより深めていくのである。このように臨地実習でのリアルさは学生に多大な影響を与え看護専門職者としての成長へつながるのである。2021年（令和3年）に文科省から報告された「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議」¹⁵⁾においても臨地実習でしか学ぶことのできない内容の具体として「シミュレーションでは再現困難な感覚、乳幼児の啼泣や離島・過疎地域に住む対象者の生活といったリアリティー、倫理的な課題が生じている場合の医療者の苦悩を知ること」などが挙げられている。ここでもやはり臨地実習で学べる現場でのリアリティーさというものが挙げられている。

従って、臨地実習で得られていた看護者としての感情の揺らぎや成長といった部分が、代替実習では得られにくく、この点が代替実習の限界かと思われる。リアリティーさを表現し、また看護専門職者としての成長を促すために、大学と実習を受け入れる施設が協同する姿勢がより一層望まれると考える。

VI. 結論

新型コロナウイルス感染症流行下の看護各論領域の代替実習で、学生がどのような学びを得たのかを探り、今後の実習指導における示唆を得る目的で文献研究を行い、以下の結論を得た。

1. 4つの実習形態と7つの実習方法が示されそれぞれの形態における展開方法や学びの詳細が得られた。
2. 看護過程の展開としては、対象者の問題点の抽出や援助方法（看護計画）の立案の段階まではほぼ学べていた。しかし、援助の実践（計画の実施）の段階になると、実際の対象者との関りが持てない状況下では、学生はケアの実践に自信が持てなかったといえる。
3. 代替実習では学生は実際の対象者との関りを持つことはできず、対象者との関係性を形成する過程での感情面の揺らぎが生じにくい。リアリティーさを表現し、また看護専門職者としての成長を促すために大学と実習を受け入れる施設が協同する姿勢がより一層望まれる。

Ⅶ. 謝辞

本研究を進めるにあたり、コロナ禍での代替実習に関するご意見を賜りました看護学科の教員の皆様に深く感謝申し上げます。また、ご指導いただきました看護学科溝部昌子教授に深く感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 初等中等教育局, 他. “新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設などの対応について, 事務連絡” 文部科学省. 2020-06-01. https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf.
- 2) 高等教育局医学教育課看護教育係. “看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について, 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書” 文部科学省. 2121-06-08. https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf.
- 3) 前掲2)
- 4) 山口裕子, 村瀬美香, 松本佳代, 緒方直子, 田中清美: 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告～在宅看護実習での学生アンケートの結果から～. 熊本保健科学大学研究誌. 18: 103-115, 2020.

- 5) 岡田麻里, 片山陽子, 諏訪亜季子: 対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価—COVID-19 感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために—. 香川県立保健医療大学雑誌. 12: 57-65. 2021.
- 6) 和田恵美子, 武田未央, 内貴千里: 新型コロナウイルス感染拡大下の在宅支援論実習 - 遠隔実習の試み -. 京都看護. 5: 37-45. 2021.
- 7) 壬生寿子, 日當ひとみ, 田向たまき: COVID-19 の影響を受け実施した在宅看護学内実習の評価と今後の課題. 八戸学院大学紀要. 63: 83-92. 2021.
- 8) 早瀬麻子, 木下純子, 田尻后子: オンラインでの母性看護学実習における学習効果. 佛教大学保健医療技術学部論集 15. 29-43. 2021.
- 9) 田中さおり, 伊織光恵, 日沼千尋: 学内実習プログラムで実施した小児看護学実習における学生の学び. 天使大学 紀要. 21 (2) : 15-31. 2020.
- 10) 土岐弘美, 國方弘子, 多田羅光美: 自由に行動できない体験から創出した精神科看護支援 - コロナ禍における精神看護学学内実習の一演習から -. インターナショナル Nursing Care Research. 20 (4) : 59-71. 2021.
- 11) 木下香織, 安藤亮, 難波香: 新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の代替学内実習での学生の学び. 新見公立大学紀要. 42 (2) : 55-62. 2022.
- 12) 高等教育局医学教育課看護教育係. “大学における看護系人材養成の充実に向けた保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策、大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告” 文部科学省. 2019-12-20. https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf.
- 13) 高等教育局医学教育課看護教育係. “看護学実習ガイドライン, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告” 文部科学省. 2020-3-30. https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf.
- 14) 安酸史子: 臨地実習の代替策を考えるうえで必要なこと. 看護展望. 45 (13) : 10-14. 2020.
- 15) 前掲2)

対象文献

1. 山口裕子, 村瀬美香, 松本佳代, 緒方直子, 田中清美: 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告～在宅看護実習での学生アンケートの結果から～. 熊本保健科学大学研究誌. 18:

- 103-115,2020.
2. 岡田麻里, 片山陽子, 諏訪重季子: 対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価ーCOVID-19 感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のためにー. 香川県立保健医療大学雑誌. 12: 57-65.2021.
 3. 和田恵美子, 武田未央, 内貴千里: 新型コロナウイルス感染拡大下の在宅支援論実習ー遠隔実習の試みー. 京都看護. 5: 37-45.2021.
 4. 壬生寿子, 日當ひとみ, 田向たまき: COVID-19 の影響を受け実施した在宅看護学内実習の評価と今後の課題. 八戸学院大学紀要. 63:83-92.2021.
 5. 早瀬麻子, 木下純子, 田尻后子: オンラインでの母性看護学実習における学習効果. 佛教大学保健医療技術学部論集 15. 29-43.2021.
 6. 田中さおり, 伊織光恵, 日沼千尋: 学内実習プログラムで実施した小児看護学実習における学生の学び. 天使大学 紀要. 21(2): 15-31.2020.
 7. 土岐弘美, 國方弘子, 多田羅光美: 自由に行動できない体験から創出した精神科看護支援 - コロナ禍における精神看護学学内実習の一演習から -. インターナショナル Nursing Care Research. 20 (4) : 59-71.2021.
 8. 木下香織, 安藤亮, 難波香: 新型コロナウイルス感染症の影響下における老年看護学実習の代替学内実習での学生の学び. 新見公立大学紀要. 42 (2) : 55-62.2022.

A Literature Review on Student' Learning Within Practical Training Alternatives in each Nursing Module during the COVID-19 Pandemic

Yuko Ide^{*}, Mio Sakabe^{*}, Miho Sakamoto^{*}, Michi Mizuhara^{*},
Maya Hashimoto^{*}, Nao Ishii^{*}, Ai Ando^{*}

< Abstract >

This study reviewed the literature on practical training alternatives conducted during the COVID-19 pandemic, focusing on the content of the practical training and nursing students' learning, to obtain suggestions for ways of conducting instruction within future practical training. We searched the Japan Medical Abstracts Society (*Ichushi*) website for literature from all relevant years using the following keywords: corona or COVID-19, and nursing, and practical training. The eight articles that prominently mentioned students and learning were arranged into a matrix table. Consequently, we extracted four forms of practical training and seven practical training methods. Through developing nursing case studies, group work, discussion, role-play, and lectures, students learned about problems and support methods in response to specific subjects, as well as the importance of nursing roles and multi-disciplinary collaboration. However, practical training alternatives that did not allow nurses to interact with patients prevented them from observing the learning outcomes of fluctuating emotions. Thus, the accumulation of experience that helps build supportive relationships as nurses is limited. Students' intention to foster a positive view of nursing and the associated respect for human life is also hampered. In the future, practical training methods in collaboration with clinical practice, which includes exposure to real-life situations and fluctuating emotions, must be considered.

Keywords: the COVID-19 pandemic, on-site practical training, alternative practical training,
nursing students, learning

^{*} Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

